

村岡花子 没後50年記念特集 (1)

村岡花子の社会活動 —東京婦人会館をめぐる—

2018年は村岡花子が1968年に亡くなってから50年にあたる年です。「史料室だより」及び展示コーナーでは、没後50年を記念して数回にわたり特集を組むこととしました。



東京婦人会館開館式 (1938年) 前列左：村岡花子 前列右：小林一三

写真提供：阪急文化財団

書齋の外の村岡花子

翻訳家、文学者としての村岡花子の功績はよく知られているが、花子の活動は書齋のなかだけに留まっていない。戦前にはラジオ番組「子供の新聞」のアナウンスを担当し「ラジオのおばさん」として知られ、生涯を通じて放送協合理事、文部省囑託、日本ユネスコ国内委員、女流文学者協会理事、日本児童文芸家協会理事、日本翻訳家協会会長、行政監察委員会委員、電通省郵政審議会委員、キリスト教文化協会婦人部委員など、実に多くの役職を歴任した。今回の特集では、多岐にわたる花子の社会活動のうち、戦前戦後にわたる「東京婦人会館」での働きについて紹介したい。そこには宝塚歌劇団の創設などで知られる小林一三（こばやし いちぞう）も関わっている。女性の教養と文化向上のための交流の場として東京に誕生した「東京

婦人会館」は、のちに日本初のカルチャーセンターとなる「産経学園」に発展していく。厳しい時代はあったものの会館の運営を担った花子の姿勢は、常に社会における女性のよりよい生き方を追求していくものであった。

小林一三の東京進出と「女子供」のための文化事業

1930年代のなかば、東京は銀座の数寄屋橋のほとりにあった丸い外壁にアールデコ調の内装で人目をひいた日本劇場（愛称「日劇」）は、「陸の龍宮」「シネマパレス」として知られ、収容客数4000人の大劇場、高級映画劇場を備え、有楽町の賑わいに色を添えていた。その5階を広々と贅沢に使った日本で最初の婦人のための倶楽部となったのが1938年誕生の「東京婦人会館」だった。



東京有楽町の日劇劇場、愛称は「日劇」。この5階に、村岡花子が常任理事だった東京婦人会館があった。(1933年竣工当時)

その会館設立のアイデアを出したのは、阪急電鉄・宝塚歌劇団・阪急百貨店・東宝株式会社をはじめとする阪急東宝グループの創業者である小林一三だった。当時、一三は関西の宝塚と同様に東京にも自前の劇場を開設し通年で宝塚歌劇公演を行うこと、さらにはそれを足場に自らの事業を東京に展開することを計画していた。1927年に地元関西の宝塚少女歌劇では、パリから帰国した演出家岸田辰彌による日本初のレビュー《モン・パリ》が上演され、話題を呼んだ。その後に続く数々のレビュー公演も大当たりし、この人気をチャンスと考えた一三は「パリ直輸入」のレビューを武器に東京進出に踏み切るのである。

1932年8月には株式会社東京宝塚劇場（1943年に東宝株式会社と改称）が創設され、1933年に一三は東京電灯の社長に就任、1934年に東京宝塚劇場が開場し、大レビュー《花詩集》が上演される。のちに東宝の経営となり、東京婦人会館が設置される日劇が開場するのも同時期（1933年）である。東京では有楽町・日比谷エリアに続々と東宝系の劇場、映画館が登場し、「宝塚」の名をつけた劇場が日本の大都市に次々と建設されていった。

詩人・小説家の阪田寛夫は、時代を先取りした小林一三の最大の卓見として、宝塚を開発する際に「女子供」すなわち家族連れを集めてみようとしたことを指摘している。関西では明治末から大正半ばの娯楽はすべて男性をターゲットにしたものに限られていたが、一三はそのよ

うな状況を一転させて、新たな消費者である女性と子どもに注目した。1913年には宝塚の地で「婦人博覧会」、翌年には「婚礼博覧会」が開催され、その余興として少女ばかりの唱歌隊である宝塚少女歌劇団の第一回公演を観覧無料で行うという経営の大転換が図られた。1915年には「家庭博覧会」も企画され、「女子供」も楽しめる、新しい娯楽が関西で展開されていった。その戦略は東京進出においても踏襲され、東宝グループは「清く正しく美しく」「家庭本位」「御家族連れでお遊びの出来る朗らかな娯楽」の振興を、新たなマーケットである東京で試みることになる。

そして、一三は「男子には交詢社、如水会館、工業倶楽部などのよい倶楽部があって、我々も便利に使用している。婦人にもこうした場所が必要なはずである」と考えた。ここでいう倶楽部とは、明治以降、都市化とともに誕生した会員や有志が集う場所であり、すでに東京には男性実業家のための高級倶楽部が存在していた。多くの女性たちを街に惹きつけるために、健全な社交場である婦人倶楽部をつくってみたいかどうか…。そうした一三の発想が有楽町・日比谷エリアにおける東京婦人会館の開館へとつながっていった。

「女性のみ的一大総合的文化機関」のメンバーとその運営

そこで一三は当時人気のあった化粧品会社のレート化粧品本舗代表取締役の板倉安兵衛に構想中の婦人会館の後援を求め、自分たちは顧問となり、実際の会館の運営は女性たちに委ねていく。そうして錚々たる各界の女性たちが理事・評議員に選出されていくなかで、特別の「常任理事」に村岡花子は推挙された。当時すでに「ラジオのおばさん」として花子は全国的に名の知られた人物だった。この常任理事への抜擢も、新しい婦人会館の看板に花子がふさわしいと考えられたのだろう。「女子供」の文化を唱えた一三と、「家庭」を重視する花子との相性は悪くなかったはずである。

東洋英和女学校の昭和12・13年度（1937・1938年度）の同窓会会報には、この会館の入会案内が掲載されている（下図参照）。東京婦人会館は、〈日本女性の文化諸般の発展向上をめざす公共機関〉〈女性のみ的一大総合的文化機関〉〈女性文化道場〉と説明されている。おそらく、この宣伝文は当時同窓会会報の編集者だった花子によると思われる。

さらに会報の婦人会館役員一覧を見ると理事長には和田織衣（財界人の和田豊治夫人）、理事には大妻コタカ（大妻学院創立者）、鳩山薫（共立女子学園理事長、鳩山一郎夫人）、長谷川時雨（劇作家、作家）、三輪田繁子（のち三輪田学園名誉校長）、守屋東（教育者、社会事業家）、吉屋信子（作家）、評議員には今井邦子（歌人、小説家）、市川房枝（婦人運動家、のち政治家）、藤原あき（藤原歌劇団運営、のち政治家）などが名を連ねている。さらには東洋英和の同窓生

である間島愛子（明治初期卒業生、青山学院図書館建設費を寄付）、麻生ふく子（明治初期卒業生、当時は同窓会委員幹事）、柳原燐子（歌人の柳原白蓮。1910年卒）も役員に加わっている。このようなメンバーをまとめ、村岡花子は常任理事として会館の企画運営の中核を担った。

会館の当時の間取り（下図）を見ると、瀟洒な洋室、広い和室を有し、食堂も完備され、心地よさそうな雰囲気が想像される。会館内では講演会や社会見学会、音楽や宝塚観劇など趣味の活動、法律や育児についての相談が行われるのと同時に、情操教育の一環として生花、書道、茶道、謡曲・仕舞、小鼓、長唄、舞踊、洋裁、コーラス、ピアノ、編物・手芸などのお稽古事を学ぶ技芸教場が設けられていた。当時、交通至便なビルのなかで、多種多様なお稽古事を一流の講師に安い費用で学べるということは画期的であり、戦前の女性は結婚までの期間を花嫁修業にあてるケースが多かったため、この技芸教場には募集とともに2000人を越える女性たちが集

“東京婦人会館とは”

一言にすれば、躍進日本の銚後をになふ日本女性の相互の教養を高めるため、時代の即して必要な、文化的知識の修得、交換や情誼の陶冶をはかる、女性のみ的一大総合的文化機関なのであります。

この空前ともいふべき輝かしい「女性文化道場」の出現は、かねて女性文化の支持者であるレイト化粧品本舗代表取締役板倉安兵衛氏が、先輩小林一三氏の推賞を得てその設備一切を寄贈されたもので、この間に顧問に、役員として別項の方々が就任され、財団法人として堅實な基礎の上に、女性自治による會員組織を築かうとするものであります。

入会歓迎

東京婦人会館役員

階五劇日町樂有区町麹

監事	理事	賛助員
(常任)		
池田麻生	三輪田繁子	五十音恵
吉守村	鳩山薫	大上井
生屋屋	長谷川時雨	伊東千登
上	大妻コタカ	河野千登
信子	和田織衣	東條世悦
豊子	石田清	伊東世悦
	和波吉本	水間松
	野田野	野島平
	久瀬久	愛俊時
	織田久	一貴代
	杉本小	金遠上
	弘牧村	藤原川
	賀冬ね	露枝女
	小上金	遠上川
	市川和	喜房邦
	市川和	喜房邦
	市川和	喜房邦
	市川和	喜房邦

(五十音恵)

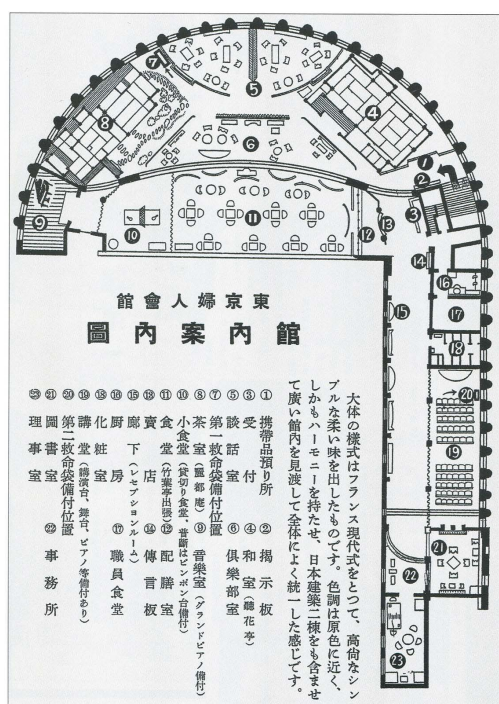
顧問

○印は常同窓会員

板倉安兵衛

小林一三

東京婦人会館の宣伝（『東洋英和女学校同窓会会報 昭和12・13年度』111頁より）



戦前の東京婦人会館の館内案内図（『産経学園五十年史』40頁より）

まったという。ここで花子は講座の企画にはじまり、子供会での朗読、英文学講座、各種座談会の司会を担当するなど、会館の活動の中心にあった。その折々の機会に、花子は若い女性たちと交流し、さりげなく女性として生きる指針を示し、それぞれの立場で自分の人生を考えることを促した。花子は会館の女性会員たちに慕われる常任理事として活躍していた。

戦時体制に取り込まれていく会館の活動

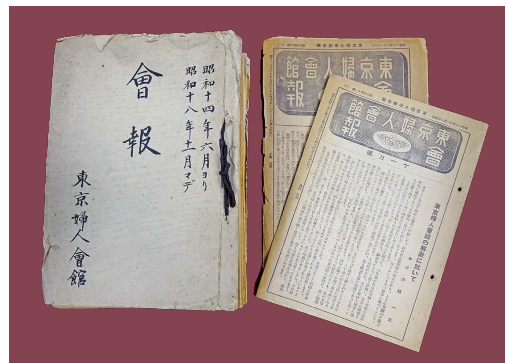
『産経学園五十年史』には、東京婦人会館の案内書掲載の小林一三による「紺碧の大空に向かって明け放たれた、ガラス張りの館のように、明朗で豊かな倶楽部。ここには秘密も猜疑も闘争もなく、同性だけが相寄って和やかな交わりをしながら、互いに知識を広め、教養を高めて新しく健全な女性文化を創造していこうというのである」という言葉が紹介されている。しかし、東京婦人会館が開館した1938年には、時局はすでに不穏な空気を帯びていた。

現在、村岡家には「昭和十四年六月ヨリ昭和十八年十一月マデ 会報 東京婦人会館」と題された簿冊が残されている。そこには開館1年後の1939年6月に創刊された会館の会報誌が綴じられており、当時の会館の活動を知るうえでの貴重な資料となっている。

会館主事だった金子眞子によって丁寧に編集され、会員間の交流を促すために発行された会報を読んでいくと、次第に「銃後をになう日本女性」の育成へと会館の活動が収斂されていく様子がうかがえる。当初は観劇や西洋料理講習会、講演会や座談会にはじまり放送局や食品工場を訪問する見学会など、趣向を凝らした会館の交流行事の紹介記事で誌面はにぎわっていたが、徐々に「来館毎に一針、千人針を作りませう」、「従軍看護婦さんへの慰問袋募集」、「余暇を作り率先して勤労奉仕作業を致ませう」、「銃後の食事問答」、「非常時電力節約へ 家庭の協力を」、「奢侈品の禁止と婦人の協力（内務省警保局経済保安課長より）」などの記事が多数掲載されていくようになる。編集後記にも「…

婦人会館の立前からはかうしたことを会員に強要は致しませんが、お国のために会員方が率先して国策に協力される上からは、どんなにでもお手伝いを致します」と記されている。

1940年10月1日の会報には、東宝が政府の新体制運動に応じ、同社経営の帝国劇場を提供したことに連動して、東京婦人会館は日劇5階から東宝ビルへと移転することが予告されている。そこでは新事業として仕事をもつ女性のための夜間部、結婚相談所が開設された。しかしその結婚事業は厚生省の要請に応じたもので、「結婚奨励に関する座談会」が会館内で開催されるなど、「生めよ殖やせよ」の国策に婦人会館が協働させられていくさまが見て取れる。



村岡家に残されていた戦前の東京婦人会館会報。当時の会館の活動を知る貴重な資料となっている。

切り取られていた記事と残されていた箇所

こうした緊迫した時局を如実に伝える会報資料であるが、実は村岡家所蔵の資料には多くの切り取りがある。現在確認されている範囲では、この会報資料を所蔵している機関はほとんど無く、この切り取られた部分がどのような内容であったのかは憶測するしかない。花子が連載のように執筆していたらしい「手帖から」の記事はほとんど残されておらず、花子の当時の言説がうかがえるような記事も極端に少ない。切り取りは花子自身が行ったのだろうか。

しかし、一方で小さなコーナーであったり、対談のなかでの花子の発言などは確認できる。花子は「有閑女性を罪悪視するべきではない」と書いていたり、若い女性たちへ「良縁より適

縁を」と諭すなど、早婚多産をむやみに奨励する風潮には安直に乗じていない。結婚とは「愛情と賢明なやり方によって築きあげてゆかれる事」であると発言するなど、花子の念頭には常に女性たちの幸福、家庭の充実があった。



技芸修業証書授与式で開会の辞を述べる村岡花子
(おそらく1943年4月25日撮影)

1943年11月25日に東京婦人会館は「苛烈を極める戦局に呼応して」解散するが、その最後の会報（1943年11月1日号）でも花子は「訣別の辞」と題して、戦争を前にして女性も勤労生活に入るべきことを述べつつも、「…私どもは特殊の婦人運動の色彩を帯びず特別な運動をも目的とせず、唯、良き娘、良き妻、賢き母、即ち、美しき日本婦道の確立を、いつの時にも目指して居りました。見方に依っては極めて平凡な目標しか持っているなかったのであります。然し私は敢てこの平凡にして美しき婦道の完成を志して来たのであります」と語っている。繰り返される「平凡」の主張が実に印象的であり、会館の活動が女性による銃後体制の強化を唱え国家主義へと傾倒していく状況のなかで、村岡花子という人が貫いた信念をうかがわせる記述となっている。

戦後 東京婦人会館の復活と産経学園

戦後、小林一三は東京婦人会館再建に向けて動く。戦後の混乱も少しずつ落ち着き、かつての婦人の倶楽部をそろそろ再開させてもいいのではないかと思案している時に、産業経済（産経）新聞社会長の前田久吉が一三を訪れ、東京

大手町に建設中の産経ビルには国際会議場もできるので、婦人のための国際的な文化施設を作りたいという相談を受けたという。前田は戦前の東京婦人会館のことも聞いており、一三は現代に見合った婦人の倶楽部の建設を勧めた。そしてその代表者には一三いわく「以前の経験も持っておられる、円満な知識人の村岡花子さん」が推薦された。

1954年7月1日には発起人会が開かれ、1955年3月12日に東京婦人会館は開館となる。顧問には前田久吉、小林一三、松平信子（東宮



東京婦人会館の役員によるお香の会。
お香を聞いている村岡花子
(『産経学園五十年史』17頁より)

御教育参与)が就任し、早嶋喜一（元産業経済新聞社長、旭屋書店創業者）が企画指導、理事長に村岡花子、役員として金子眞子、坂西志保（学者・評論家）、吉屋信子、川喜多かしこ（映画事業家）、波多野勤子（児童心理学者）などが就任し、女性に限って会員を募集しながら運営された。発足後まもなく社団法人となり、技芸教室を第一に据えた倶楽部の活動が展開された。

花子はこの新たな時代の婦人のための文化施設の運営に奔走する。『産経学園五十年史』には、さまざまな会館の催しで理事長として懇談し、講演会の司会や通訳を務め、修了証書授与式で受講者に証書を授与するいきいきとした花子の姿が掲載されている。小林一三だけでなく、村岡花子もまた「婦人の文化・教養向上」のための文化施設の再開を喜んでいたのである。

新しい婦人会館の会報、月報には毎号花子による巻頭言が掲載され、憲法から国際化、日本文化、学識と教養、人間完成の修練としての技芸など多岐にわたる話題が縦横無尽な筆致で執筆されている。戦時体制下の暗い時代の婦人会館の運営とは一線を画し、自由な文化活動が許されるようになった社会における新たな婦人会

館の活動に向けての花子の意気込みをうかがうことができる。

東京婦人会館は会員の交流のための倶楽部として当初開設されていたものの、技芸教室が大きく伸展していったことから、1956年にはこの部門を別にし、東京婦人会館の附属学園とした。翌年3月には「東京産経学園」として独立、男性の入学も可能となり、性別、資格、年齢の制限のない自由な学園組織となった。産経学園の創設者にあたる早嶋喜一は、お稽古事を文化運動という新たなビジネスモデルとしてとらえ、産経学園の安定した経営基盤の確立を目指した。そうして各地に分校を開設していった産経学園は日本のカルチャーセンターの先駆けとして伸展し、1980年代のカルチャーブームによるカルチャーセンターの隆盛の一翼を担っていく。村岡花子は産経学園の学園長を長年務め、その発展に大いに寄与した。

おわりに — 「山の上の城」 —

『産経学園五十年史』には、戦前の東京婦人会館会報誌創刊号（1939年6月8日号）に掲載された村岡花子の「山の上の城」と題した文章が転載されている。「『山の上の城はかかれることが出来ない』という言葉がある」と始まり、東京の中心地にある日劇5階に東京婦人会館があったことに触れつつ「…その存在の精神的意義から考えたなら、『山の上に立つ城』と相通じるものを持っていると、私はしばしば思う。（中略）『山の上の城がかかれることが出来ない』ように、東京婦人会館も、まずその所在地勢上、衆目からかかれることが出来ない」とそこには書かれている。

花子は「山の上の城」について特に出典を書いていないが、この言葉から思い出すのは「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない」（マタイによる福音書5章14節）の聖句だろう。この聖句は、アメリカへの初期植民者のジョン・ウインスロップが、アメリカ入国の際に新大陸での新たな人生に臨む自分たちを「山の上の町」にたとえ、神の前

において正しい行いを貫く決意を述べたことで有名である。

花子がこの巻頭言を書いた頃、すでに時局は女性を社会に動員し、戦時体制に組み込んでいく方向に進みつつあった。それに対し花子は「家庭という小集団生活」に代表される女性本来の狭い生活範囲での婦人の進歩を「女性文化の向上」とし「東京婦人会館は、婦人本来の生活の姿においての婦人の進歩発展を、大きな目標としていると信じて私はここに名を連ねている」と締めくくっている。

時代の激流のなかに屹立する「山の上の城」に託した花子の思いは、時節への同調だったのか、それともささやかな防御だったのだろうか。東京婦人会館の会報に残された花子の言葉の数々は、言論統制の網目のなかでの厳しい選択が前提とされており、それを読むには二重にも三重にもその含意を検討する必要がある。常に言葉に鋭敏だった花子が「山の上の城」にたとえた東京婦人会館であったが、そこにおける花子の活動の検証は、村岡花子という人物を知るうえでの一つの視点を与えてくれるだろう。

（松本郁子／まつもと いくこ 史料室）

【主な参考文献】

- ・『産経学園五十年史』産経学園 2005年
- ・阪田寛夫『わが小林一三 清く正しく美しく』河出書房新社 1983年
- ・橋爪伸也『倶楽部と日本人 人が集まる空間の文化史』学芸出版社 1989年
- ・本田和子「村岡花子」『言論は日本を動かす—⑤【社会を教育する】』講談社 1986年
- ・渡辺裕『宝塚歌劇の変容と日本近代』新書館 1999年

村岡花子文庫展示コーナー

（本部・大学院棟1階）

2018年4月2日～9月29日

「村岡花子 没後50年企画展示①

村岡花子と東京婦人会館

—時代に先がけた女性のための文化施設—」

〈資料紹介〉 32

村岡花子文庫 —蔵書のなかの宝もの—

梶田 マリ

2014年度に村岡家から本学院に寄贈された〈村岡花子文庫〉の蔵書について、2015年8月に水谷悟元中高校教諭を中心に、高等部卒業生が基本的な蔵書目録を作成した。その作業過程および蔵書の概要については「史料室だより」No.85で水谷氏が紹介しているのでご覧いただきたい。続いて9月からは筆者が図書1冊ごとに書誌事項、図書の状態などの再確認を行ったが、作業中に花子による図書への書き込み、挟み込み、寄贈者からの献辞など思いがけない痕跡を次々に発見、これらは彼女の人となりを示すものとして詳しく目録に載せることにした。2017年末これらの作業を一応終了した（現在の総冊数は1168冊）。

花子はこれらの本をどのような思いで手に取っていたのだろうか、その一部を紹介したい。

① 花子による書き込み

重要な意味を持つ図書には大胆にフェルトペン、ときに赤で「保存本」「保存版」「重要」などと書き込んでいる。フェルトペンが発売される前の時代の図書にも記入されているが、花子が後になって改めて書いたようだ。また本文中に気になるところがあると自著だけでなく、献本にも朱が入れている。

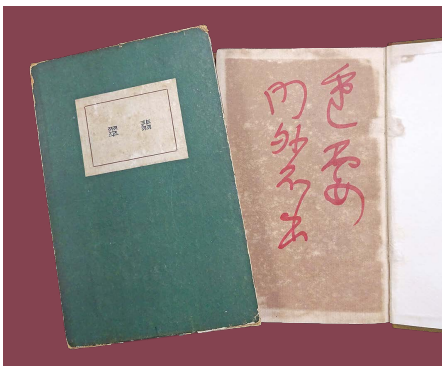
『翡翠』 片山廣子著 1916年（登録No.8）
「重要 門外不出」と見返しに赤のフェルトペンで記入。この大胆な書き込みでいかに大切な本であったかがわかる。

『モーセが修學せし國』 M.ダッフ、N.ホープ著 安中花子訳 1919年（登録No.25）

「大正7年10月30日甲府市英和女学校の寄宿舎の一室にて訳了 赤坂にて 安中花子」と見返しに記入、さらに表紙に朱書で「保存本 重要」と書き込み。後に夫となる村岡徹三の福音印刷所で印刷された大切な本である。

『小鳥のささやき』 アームストロング著〔村岡花子訳〕 1926年（登録No.47）「ミチヲチャン…（中略）大正15年9月1日 道雄永眠の夜」と見返しに記入。最愛の一人息子道雄を疫痢で失った夜の慟哭が書き込まれている。

『王子と乞食』（岩波文庫）マーク・トウェーン著 村岡花子訳 1945年（登録No.327）「昭和21年12月 終戦後最初の本 花子」と表紙、奥付の両方に記入あり。花子にとって戦後最初に出版された本として岩波文庫から出たことに思いが込められているのではないか。ちなみに『王子と乞食』は最初、1927年に『世界家庭文学大系』（平凡社）に収録された。



『翡翠』見返しとカバー



岩波文庫版『王子と乞食』

『若草物語』 オルコット著 村岡花子訳
『少女少女新世界文学全集9』に収録 1963年
(登録No.893)「保存版1963年(昭和38年)3
月22日には、出来あがる。愛情をこめて夫徹三に
ささげる」と箱に記入。夫徹三が亡くなる時
(1963年2月6日永眠)に手掛けていたことが
うかがえる。



『若草物語』中扉と箱の書き込み

これら表紙の大胆な「保存版」「保存本」さら
に家族へのことばから、花子が各々の図書に
書かずにはいられなかった思いが伝わってくる。

② 花子以外による書き込み(献辞など)

花子の交友関係が偲ばれる筆録である。

『幻の華』伊藤燐子(白蓮)著 1919年(登
録No.22)「安中花子様 1919.5.8.」。標題紙に
書かれた白蓮の献辞だけでなく本文中に花子に
よるとされる傍線、書き込みがある。

『河明り』岡本かの子著 1939年(登録
No.238)「呈 村岡花子様 昭和14年冬 かの
こに代りて 一平生」。岡本かの子は1939年2
月に永眠。夫一平が妻に代りしたためなのか。
かの子、一平は岡本太郎の両親であるが、その
型破りな夫婦関係から思うとこの献辞にも考え
させられる。

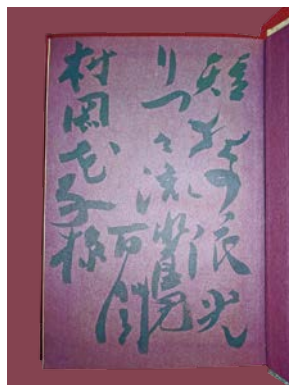
『和琴抄』今井邦子著 1935年(登録No.182)
「著者 村岡花子様 恵存」。見返しに献辞、目
次に花子の印があり、さらに新聞に掲載された
書評が貼付。この書評の記事にも校正加筆。校
正は花子の癖だろうか、ほかの本でもよく見か
ける。



『和琴抄』著者の献辞(左)と
貼り込まれた新聞記事(花子の書評・右)

『船の夢』内田百閒著 1941年(登録No.282)
百閒による花子への句が見返しに墨書。

「短夜の浪光りつ々流れ鳧(けり) 百閒 村
岡花子様」とある。



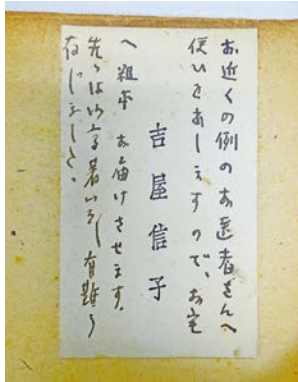
『船の夢』大胆な墨書の句

③ 図書に挟み込んであるもの・貼り込まれて いた資料

村岡花子文庫展示コーナー企画展「村岡花子
文庫 書斎のなかの宝もの」(2017年度)で一
部紹介したが、花子の蔵書では手近にあるもの
が葉になり、また『和琴抄』でも紹介したよう
に書評記事などその図書と関連あるものが挟み
こまれ、あるいは貼り込まれていた。

『野に住みて：歌集』片山廣子著 1954年
(登録No.532)村岡花子宛「片山広子告別式通
知」の葉書と「片山ひろ子 昭和4年ごろ 大
森にて」と裏書された写真一葉が貼付。1957年
廣子の告別式の知らせを受けてこの本を取り出
し、以前撮影された廣子の写真と一緒に葉書を
貼ったのだろうか。

『残されたる者』 吉屋信子著 1946年（登録No.328）「お近くの例のお医者さんへ…」と書かれた吉屋信子の名刺が貼付。メモを添えた本をお使いの者が届けた情景が浮かぶ。



『残されたる者』に残された著者・吉屋信子のメモ

『惜しみなく愛は奪ふ』（角川文庫）有島武郎著 1953年（登録No.502）

畳まれた壱圓札、5枚が挟み込まれていた。

『谷間の百合 上』 バルザック著 宮崎嶺雄訳 1946年（登録No.337）「Whitman's」チョコレート箱に入っていた説明書が挟み込み。花子はかなりの甘党だったようで、ほかの本にもチョコレートの銀紙が挟まれていた。



『谷間の百合』と、Whitman'sチョコレートの説明書

『知と愛 上』 ヘルマン・ヘッセ著 高橋健二訳 1951年（登録No.449）東急バスの使いかけの回数券と押し花を発見。



『知と愛』に挟んであった、使いかけの回数券と押し花

また亡くなった道雄のためにそろえていた絵本を基に始まった道雄文庫の図書には「道雄文庫ライブラリー蔵書」のゴム印が押印され、中には図書の背に分類番号の付与されたブックラベル、ブックポケット・貸出カードが貼られたものもある。「図書出納管理当番表」、出版社が作った目録カードなどもときに挟まっていた。家庭文庫活動の片鱗が残っている。

④ 自著に限られていた切り取り

コピー機など無く複写が容易でない時代に、ほかに使用するため花子はページを切り取ったのか。切り取りのある図書には童話集が多く、また赤鉛筆などで文章に書き込みがされているものもあり、読み聞かせなどのために書き換えていたのか。

「花子は本とペンによって近代を生き抜く力を与えられた」（「史料室だより」No.85）と村岡恵理のことばにあるが、まさに一冊一冊の本と向き合った花子の姿が浮んでくる。

なお史料室では切り取られた箇所についてはできる限りほかの図書館に複写を依頼し補填した。

※文中の（登録No.）は史料室で付与した登録番号

【参考文献】『アンゆりのかご 村岡花子の生涯』村岡恵理著 新潮社 2011年

（かじた まり 史料室ボランティア・元大学図書館事務長）

〈思い出の先生がた〉35 丹羽淑子先生

より高い目標に向かってチャレンジされたお姿

吉岡 元子

丹羽淑子先生は、1954年に東洋英和女学院短期大学英文科が認可された草創期から1979年に退任されるまで、英文科の中心的教授として尽力されました。先生はまた、英文科と保育科学生の共生を願われ「学生会」の生みの親となられ、18年間も学生部長として責任を負われました。また発達心理学の専門を生かして小児相談センターの初代の主任を果たされたことも記憶に残るところです。しかしこの稿では、困難や試練を乗り越えて、より高い目標を目指してチャレンジされた先生のお姿をお偲びしたいと思います。

私は1963年、短期大学英文科の教員として招聘された時に丹羽淑子先生に再会しました。再会と申しますのも、先生との最初の出会いは私の10代に遡ることになります。先生の印象があまりにも強烈だったので、70年後の今でも、その時の光景を映画の一場面のように覚えています。当時私の父は、原爆の荒廃から復興した広島女学院大学の教授をしており、若い丹羽先生も同じ大学で教鞭をとっておられました。ある日、父と散歩をしていた時のこと、ハリウッドの俳優のような美しい女性がさっそうと歩いてこられ、父に挨拶をされました。日本人離れしたその女性に私はじっと見入ってしまいました。モダンな帽子をかぶり、紺と白の素敵なスーツを身に着け、ハイヒールを履いた知的な女性。「あの方は？」と父に訊ねると、アメリカ留学を終えて帰国された大学の同僚であるとのこと。後に分かったことですが、ご主人と幼いご子息を残して単身アメリカの大学院に留学され、より高い目標を目指して、困難や寂しさも乗り越えてチャレンジされた自立した女性であられることを知りました。子どもの頃に強く印象づけられた先生と、後に同僚として働くことになるとは夢にも思いませんでした。

チャレンジ精神は、40代の後半、現職のご多忙の中、博士課程を修了され、研究を積み重ね

られて、50代後半に博士号を取得されたことにもうかがえます。私がおその後、国際基督教大学から招聘されたとき、科長としてすばらしい推薦状を書いてくださいました。ご自分の人生と重ね合わせてのことか、「人生は次のステップにチャレンジすることが大切よ」と励ましてくださいました。

お孫さんのダウン症を経験された先生は、また新しいチャレンジを試みられました。ダウン症児と家族の在り方について専門的立場から積極的な指導をされ、90歳近くまでその課題に光を投げ続けられました。そして先生が91歳の時『あなたたちは「希望」である—ダウン症と生きる』を出版されました。

丹羽先生の「女性の真の自立は経済的な自立を伴ったものでなければならない」というお言葉は卒業生ばかりでなく、多くの女性に影響を与えました。先生の100年にわたるご生涯を感謝とともに懐かしく思い出しています。

(よしおか もとこ 国際基督教大学名誉教授)



丹羽淑子先生

丹羽 淑子（にわ よしこ）先生

— 略 歴 —

1913年	8月1日	広島市に生まれる
1934年		広島女学院専門学校 (現広島女学院大学) 英文科卒業
1934年		広島私立女子商業学校奉職
1944年		広島女学院専門学校英文科専任助手
1949年		George Peabody College for Teachers 留学、BA・MA取得
1952年		広島女学院大学英文科専任講師
1954年		東洋英和女学院短期大学英文科教授、 非常勤講師(1979年～1983年)
1970年		日本大学大学院博士号取得
2013年	8月20日	永眠(享年100歳)

史料室の活動より (2017年10月～2018年3月)

(☆は複数回の事項)

- 10月・見学—展示コーナー・高等部校舎のヴォーリス意匠 大学のK教授と奈良女子大学の同級生(8名)
- 資料提供—管財課へ追分寮と野尻キャンプサイトの由来(大学学生手帳作成のため)
 - 来室—W宣教師とT氏 富山伝道、アームストロング宣教師について調査
 - 照会(大学)—仏英和は今何という学校か? →白百合学園中学校・高等学校
 - 照会—中高部生徒が「祈りの輪」参加にあたり東日本大震災における英和の取組みについて →取組みを紹介した記事を提供
 - 照会—卒業生のK氏より、立教大学のアメリカ研究所紀要初期のバックナンバー有無 →大学図書館所蔵雑誌を取り寄せ
 - 「日経おとなのOFF」誌 11月号特集のため、村岡恵理氏が展示コーナーで撮影・取材を受ける
 - 来室—卒業生K氏、目録データベース化の助言
 - 来室・取材—本学3年生4名 ナショナルトラスト運動とヴォーリス建築に関する調査
 - 出張—学園アーカイブズセミナー「著作権法と学園アーカイブズ」
- ☆来室・調査—立教女学院短大准教授N氏 保育関連 児玉光子氏ノート調査
- 来室—院長 第3回村岡花子記念講座のための資料収集
- 11月・「史料室だより」No.89刊行
- 画像提供—大学のProject Based Learningにおける学校案内作成のため、カートメルなど3点
 - 依頼—中高部より、創立記念週間パネルのうち修学旅行の一部修正チェック
 - 来室—日本大学O准教授 英和の制服について、制定のころを調査
 - 来室—小学部母の会編集部担当者「ぎんなんだより」特集記事 校内服制定のいきさつを調査 →K先生、1979年卒T教諭、1976年卒Y氏に照会
 - 照会—山梨英和史料室より 野口ふみ氏(1906年高等科卒)、野口ゆき氏(1898年高等科卒)について →ふみ氏については画像および同窓会会報への寄稿を提供
 - 照会—教文館より、『日本キリスト教歴史大事典』を改訂中につき、卒業生北村(比屋根)雪氏が学んだ神学校はどこか →聖經女学校だと思われるが、証拠はなし
 - 来室—関西学院学院史編纂室I氏
 - 来室—総務課広報I氏「楓園」掲載のため昔の宗教教育実践の様子画像を検索
 - 来室—Y氏「湖畔の声」掲載の写真閲覧
- 画像提供3点
 - 来室—卒業生K氏 資料閲覧
 - 展示—小学部5年生「村岡花子さんへの手紙」受賞者作文2点展示
 - 照会—小学部母の会編集部 冬校内服と体操着について追加リファレンス
- ☆校正—「KAEDE MAGAZINE」Vol.15 ビジュアル写真館 File 4
- ボドリアン図書館司書K氏より、オックスフォード大学博士課程の学生が、日本留学時に史料室を利用したい旨連絡あり →現在情報交換中
 - 照会—弥生美術館U氏より、2018年3月29日～6月24日開催の「セーラー服と女学生」展にて英和の制服の展示と、同時発売予定の書籍に、制服を撮影した写真の掲載を希望 →中高部の了解を得て協力。小学部母の会も協力
- 12月☆来室—卒業生M氏 短大授業要覧、大学講義要覧を閲覧
- 同窓会クリスマス礼拝お茶の会にて『カートメル資料集第5号』を販売、資料頒布
 - 来室—卒業生K氏 62年完成の中学部校舎資料を設計者松ノ井覚治氏のご遺族へお渡しの申し出
- ☆打ち合わせ—出版文化社と分類の検討
- 来室—再開発担当Y氏 小学部敷地にあるという数本の「ご神木」を特定したい →卒業生T氏に電話、設計図を参照するが、詳細不明
 - 来室—東光会広報2名「東光」特集の相談
 - 文案作成—大学の来年度学生手帳掲載の歴史のページ(学生支援課に協力)
 - 照会—慶応大学図書館情報学卒のS氏より、村岡花子訳『ごきげんなライオン』初版の所蔵の有無 →所蔵せず
 - 来室—日本女子大学若葉会会長S氏、副会長S氏と村岡美枝氏 展示および広岡浅子と村岡花子関連資料見学
 - 来室—小学部3年Kさんと保護者と友人。約30年前の小学部体操服の画像閲覧
 - 照会—村岡美枝氏より「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」に替わる英和の展示コーナーアドレスを、青い鳥文庫・新潮文庫巻末に掲載したい →了解
- 2018年1月・画像提供—柏書房へ『日本のインテリアデザイン全史』掲載のため、旧岩崎小弥太郎(現国際文化会館)画像1点
- 来室・調査—大学T講師「女学雑誌」にとりあげられた東洋英和について
 - 中高部地歴部ボランティア20名—小学部資料、寄贈資料の仕分けなど作業

- ・出張一大学史資料協議会研究会（会場 国際基督教大学）「ICU歴史資料室の概要と活動」他
- ☆来室・調査一高千穂商科大学准教授I氏（短大卒業生）英和の英語教育について
- ・第3回史料室委員会
- ・校正一「ぎんなんだより」50周年記念企画ページ
- 2月・照会一帝国製糖の牧山清砂氏に関する資料はないか →日本甜菜（てんさい）製糖（株）年史編纂のため。昨年6月に同社から照会があった旨お伝え
- ・大学関連校正2件一來年度大学案内と学生手帳
- ・照会一福井県緑幼幼稚園より、年史編纂のため6名の宣教師の資料と画像 →『来日メソジスト宣教師事典』、大学の「共同研究助成報告書2002-2004」より該当箇所のコピー、画像候補を送る
- ・受贈一教文館より中村妙子改訳『バレエシューズ』（2015年に村岡花子訳の同書の調査に協力した）
- ・校正一河出書房新社『セーラー服と女学生』の東洋英和の制服のページ
- ・制服撮影一上記刊行物の掲載写真差し替えのため
- ・出張一市川房枝記念会女性と政治センター（村岡花子関連資料調査のため）
- ・納品・説明・再配架一紀伊國屋書店O氏 逐次刊行物の目録について
- ・来室・打ち合わせ一梁プランニングO氏と総務課広報担当者 リニューアル「楓園」の画像に使う記念品選定、「英和の今昔」に相応しい画像の紹介
- ・照会一中高部教諭T氏より、展示中の村岡花子のストップウォッチはどう使ったのか →ラジオの「子供の時間」の原稿作成やSPレコードへの童話の朗読のために必要だったと思われる
- ・照会一S氏より七尾幼稚園（石川県）に関わった宣教師について ミス・デウォルフの資料を送付
- ・照会一大学院図書室Y氏より、本大学・大学院の歴史に関する資料があるか →公の刊行物のみ所蔵
- ・照会一中学部長より、中高部改築工事中のプレハブ校舎時代の様子について →「史料室だより」No.50、新聞部発行「かえで」、図面を提供
- ・照会一本阿弥書店より、片山廣子関連の画像5点 →画像提供3点
- 3月・来訪・調査一H氏とG氏 「横浜夢座」公演「赤い靴をはいた女の子（仮）」のための資料収集のため →「佐野きみ」「永坂孤女院」『五十年史』より関連資料提供 「キングスドオタース会記事」閲

覧 『110年史』贈呈

- ・麻布未来写真館 パネル展（3月2日～26日）旧飯倉小学校、府立第三高等女学校、香蘭女学校、住友庭園に関する展示
- ・来訪・照会一昭和初期に東洋英和女学校で教えた「渡邊テツ」について →『五十年史』の教員リストに掲載されず不明
- ・出張一大学史資料協議会研究会（会場 明治大学）「資料目録について考える」
- ・閲覧一N氏 野尻関係資料
- ・来室・調査一S氏 功刀嘉子先生資料
- ・来室・調査一K氏 功刀嘉子先生資料、保育日誌
- ・照会一N氏 片山廣子研究のため、ロセッティの影響を示す資料がないか →不明
- ・来室・照会一岩手県立大学K教授 初期教員 淵澤能恵について調査

史料室所蔵資料の目録化作業報告

逐次刊行物の細目目録作成、史料目録の分類項目の検討、資料ファイル再編成などを行った。

主な寄贈資料・移管資料

- *『キリスト教学校教育同盟百年史 資料編』
- *大学子ども保育研究所より 資料多数 他

購入資料

- *『戦時下のキリスト教主義学校』樽松かほる 他 共著 教文館
- *『火の後に：片山廣子翻訳集成』片山廣子著 幻戯書房
- *『カナダの女性政策と大学』犬塚 典子著 東信堂 他

<お知らせ>

- *展示コーナーにて現在開催中

4月2日～9月29日

村岡花子文庫展示コーナー

「村岡花子 没後50年企画展示①

村岡花子と東京婦人会館

—時代に先がけた女性のための文化施設—

学院資料展示コーナー

「受贈資料展① 2012～2017年度」

- *「史料室だより」は全号 学院ホームページで閲覧できます。

URL: <http://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

- *史料室では、学院の歴史や学園生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがありませんでしたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】

東洋英和女学院史料室（法人事務局内）

Tel.03-3583-3166（直） Fax.03-3583-3329

E-mail : archive@toyoeiwa.ac.jp